

### 日本人々の国際協力参加を後押ししたい

大学卒業後、民間企業に就職した桑江直人さん。イギリス留学を経てJICAに転職を決めたのは、国際協力への強い思いがあったからだ。JICAにおける国内外での勤務経験を生かし、日本の人々に国際協力を伝える仕事に奮闘している。

#### 民間企業から 国際協力畑にチャレンジ

私は、大学で経済学部を専攻し、卒業後は教育関連企業の営業職として4年間働きました。教材の販売などを通じて教育に携わることになりがいを感じていましたが、30歳を目前に控え、「このままで良いのだろうか」と考え始めました。そこで、以前から関心のあった国際協力の分野にチャレンジしてみようと思い、イギリスの大学院に留学して開発学を学びました。

帰国後、2004年にJICAに入構しました。国内事業部での研修業務担当、アジア第一部でのカンボジア担当などのほか、フィリピン事務所での在外勤務も経験しました。フィリピンでは、貧困削減班長として、主に上下水道分野のプロジェクトに携わりました。そこでは、国際協力のプロジェクトが実際にどのように形作られ、運営されているのかを学ぶとともに、一つのプロジェクトが実に多くの人々の協力に支えられて成り立っていることを実感しました。その中で、JICA職員として、関係者を結び付けながら効果的にプロジェクトを推進していく仕事の醍醐味を味わいました。

現在は、九州国際センターの市民参加協力課で九州圏内を対象に、ボランティア事業の取りまとめ、開発教育支援業務の取りまとめ、広報の3つを主に担当しています。

3つの業務に共通しているのは、できるだけ多くの人に知ってもらい、参加してもらい、ことが重要だということ。しかし、これを実際に成果に結び付けるのは簡単なことではありません。他の地域同様、九州圏内でも近年、ボランティアの応募者が減少傾向にあります。また、開発教育は、実施件数自体は伸びていますが、現場である学校のニーズに合わせ、さらに、グローバルに活躍する人材の育成につなげていくためには、まだまだ改善が必要です。

そうした中で、私が意識しているのは、「顧客目線」を大切にすることです。JICAは民間企業ではありませんが、相手あつての仕事ですから、私たちの企画を活用する側の視点に立つて業務に取り組むことを心掛けています。また、どの業務も関係者が多いため、関係者の利害を調整しつつ、物事をスムーズに進めていくマネジメントスキルも重要です。

#### 自らの体験を基に 国際協力を伝える

市民参加協力課での業務は、出前講座やセンター訪問など、学生の前で話す機会が比較的多いことが特徴です。JICAの事業や世界の現状を知ってもらうことで、これからの将来を担う学生に対し、働き掛けられることにやりがいを感じています。私自身も学生時代、最初は海外と言えは先進



JICA九州国際センター  
市民参加協力課  
**桑江 直人**  
KUWAE Naoto

大学卒業後、教育系民間企業に4年間勤務。イギリスの大学院で開発学の修士号を取得した後、2004年にJICA入構。11年12月より現職。



教師海外研修の帰国後研修の様子

国のイメージが強かったのですが、偶然見た難民の映像がきっかけで、だんだんと視野が広がり、開発途上国により関心を持つようになりました。JICAを知ってもらうことで、少しでも多くの学生たちが同じように、幅広く世界に目を向けてくれたらと思います。

今後は、もし出向などの機会があれば、積極的に手を挙げたいと思っています。海外に出ると、それまでとは違った視点で自分の国を見られるようになることがありますよね。それと同じように、他の組織からJICAを見ることで幅広い見識を身に付け、その経験を基に、若い世代に国際協力について伝えていけるようにしたいと思います。



フィリピンの地方水道改善プロジェクトの終了時評価のため、近隣住民にインタビューを行う桑江さん(写真中央)